

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2013

課題番号：21310167

研究課題名(和文)トラウマとジェンダーの相互作用：精神病理・逸脱・創造性

研究課題名(英文)Interaction of trauma and gender: psychopathology, deviation and creativity

研究代表者

宮地 尚子(Miyaji, Naoko)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：60261054

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,300,000円、(間接経費) 3,390,000円

研究成果の概要(和文)：トラウマとジェンダーの相互作用を、(1)精神病理的側面から、(2)犯罪行為や逸脱現象の側面から、(3)文化創造的な側面から探り、明らかにした。

(1)では複雑性PTSDの分析を行った。性被害に関するシンポジウムの開催、ハンドブックの翻訳・出版を行った。(2)では薬物依存女性のトラウマ被害の影響について論文にまとめた。加害者更生プログラムや修復的司法プログラムについて分析を行った。(3)ではメディア発信・アート表象に関するワークショップを開催した。(1)～(3)を統合し、トラウマの入門書を執筆・出版した。東日本大震災の発生に伴い、そのトラウマについてもジェンダー視点からの研究を行った。

研究成果の概要(英文)：Interaction of trauma and gender was analyzed from three dimensions; 1)psychopathology, 2)deviation and crimes and 3)cultural creativity. On the first dimension, concepts of complex PTSD and dissociation were scrutinized, symposium on sexual violence was held and an American handbook for mothers of sexual abuse victims was translated and published in Japanese. On the second dimension, a paper was published on experience of violence and abuse and their impact on women with drug addiction. Crime offenders programs and restorative justice programs were reviewed and analyzed. On the third dimension, workshops were held on social media projects and art expressions. As an integration of these three dimensions, an introductory book for general public was published on trauma. In addition, after the unexpected East Japan Great Earthquake on 2011, its traumatic aspects were analyzed from gender point of view.

研究分野：総合人文社会

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：トラウマ ジェンダー 性暴力 PTSD 逸脱

1. 研究開始当初の背景

性暴力やドメスティック・バイオレンス(以下DV)など、ジェンダーやセクシュアリティに基づく暴力については、「女性に対する暴力」として1970年代頃から国連レベルでも問題化され、実態調査や被害者支援などの施策が講じられるようになってきた。日本でも2001年よりDV防止法が施行されるなど徐々に取り組みが進みつつある。これらの暴力、特に成長過程の早期からの暴力や、親密な関係の中で長期間続く暴力によるトラウマは、被害者の心身に深刻かつ様々な症状をもたらすのみならず、対処行動や生活様式をも変化させ、被害者のその後のジェンダーやセクシュアリティにも影響を与えることが諸外国の研究から明らかになっている。しかし、日本の精神医学においてトラウマ研究の歴史は浅く、ジェンダーの視点も非常に乏しかった。一方、ジェンダー研究における、トラウマのジェンダー理論への組み入れも本格的になされていなかったため、トラウマとジェンダーの相互作用に関する総合的な研究調査が必要であった。

2. 研究の目的

(1) トラウマとジェンダーの相互作用を、精神病理的側面から明らかにすること。長期のトラウマの影響を包括する「複雑性PTSD」と「Developmental Trauma Disorder」について分析すること。

(2) トラウマとジェンダーの相互作用を、犯罪行為や逸脱現象の側面から明らかにすること。とくに、トラウマの長期的な影響やジェンダーとの潜在化された相互作用を、非行・犯罪、逸脱行為や、対人関係トラブルや親密圏の暴力から分析すること。

(3) トラウマとジェンダーの相互作用を、当事者の自助グループやメディア発信・アート表象など文化創造的な側面から明らかにすること。当事者の研究や活動から自己回復や創造性に向かう流れについて分析すること。

3. 研究の方法

研究代表者、研究分担者、連携研究者、臨床系の研究協力者、犯罪・矯正系及び当事者運動に関わる研究協力者、海外研究協力者らと共同研究を行った。臨床事例研究、文献研究、関連機関視察やフィールドワークを行い、共同研究会議を開いた。内容は下記の通り。

(1) ジェンダーやセクシュアリティに基づく被害を受けた女性はもちろんのこと、男性被害者、特に性的虐待を受けた男性(男児)の臨床事例や文献研究を詳細に検討し、女性被害者と比較した。研究期間中における東日本大震災の発災を受け、災害のトラウマの蓄積とジェンダーについても調査分析を追加した。

(2) 女性の薬物依存症者に焦点を当て、依存の背景や処罰・更生保護の状況もみながら、男性の依存症者との相違を探った。中でも、性的虐待や更なる性的搾取の経験、売春など性的「逸脱」行為との関連等を探り、発達の視点から捉え直すと共に、ジェンダーやセクシュアリティ規範の再生産とかく乱の可能性について考察した。

(3) DVや性暴力被害者や薬物依存症者の自助グループや当事者研究、インターネットによる当事者間のコミュニケーションの場の創成や情報発信、アート表象やパフォーマンスに関して、ジェンダーとの相互作用を分析した。被害者の回復プログラムや加害者更生プログラムにおけるアートやパフォーマンスの役割もジェンダーの視点から分析した。レジリエンシーやポスト・トラウマティック・グロースの議論も参考にした。

4. 研究成果

(1) 精神病理的側面から分析したトラウマとジェンダーの相互作用について、下記のような成果が得られた。

長期のトラウマを受けてきた臨床事例や、フランク・パトナムの文献研究、最新の脳画像分析等について共同研究会を行い、「複雑性PTSD」と「Developmental Trauma Disorder」中でも発達過程でのアタッチメントの問題と解離症状、自己感情調整の関連を、連携研究者らとともに分析した。トラウマやジェンダーといった分野のみならず、日本の小児発達学、発達障害研究の発展という点においても重要な示唆が得られた。

性暴力被害に関する講演会やシンポジウムの開催によって、社会に向けて議論を開いた。潜在化しがちであり、日本ではまだ研究の蓄積の浅い性被害についての啓発の機会となった。また、性的虐待を受けた子どもの母親向けの、米国の性被害対応ハンドブックを翻訳・出版した。母親を支援し対処の指針を示す数少ない実践の書として、支援現場に普及しつつある。海外研究協力者を招聘し、共同研究会を行い、分析や研究の成果を論文として発表した。

(2) 犯罪行為や逸脱現象の側面から分析したトラウマとジェンダーの相互作用について、下記のような成果が得られた。

薬物依存女性のトラウマ被害の影響を分析し、違法な自己破壊的行為へ至る道筋、再演としての親密圏の暴力、スティグマ化がもたらす悪循環等、トラウマやジェンダーの潜在化された相互作用を分析した。分析について論文にまとめた。

DV、ストーカー事件、痴漢事件、児童ポルノ等の女性(女児)への暴力について、社会的に重要な事例を取り上げつつ、ジェンダーと法の視点から分析を行った。分析によって得られた知見を論文として発表した他、学会発表等においても「女性化された」刑事司法のあり方について提言を行った。

米国ツーソンとアルバカーキの受刑者更生施設アミティおよび刑務所を視察し、治療共同体での更生プログラムや修復的司法プログラムがもつ自己回復への効果を、従来のものと比較した。特に家族への影響、DVや性暴力の被害/加害などとの関係、世代を超えた影響について分析した。「被害者も加害者も変われる社会へ」という裁判員制度に関するパネルディスカッションを行った。国際犯罪学会において犯罪と女性のトラウマに関する研究発表を行なった。

(3) 文化創造的側面から分析したトラウマとジェンダーの相互作用について、下記のような成果が得られた。

薬物依存女性の自助グループ・ダルク女性ハウスとの共同プロジェクトとして、「詩のワークショップ：もう一つの声」や体験アート展「握れないけど触れたとき」を、また UCLA 教授スーザン・メーソン氏によるジェンダー的トラウマを受けた人のための演劇アートワークショップ「コミュニティの創成」を行い、トラウマが自己回復や創造性に向かう流れを実践・分析した。

表現プロジェクトを行い、DVや性暴力などのトラウマ被害者やその子どもたちが自己回復や創造性に向かう流れを実践・分析した。また国際シンポジウム「つなげるための<しかけ>をいかに作るか? - 協働的表現における対話・身体・場をめぐる」に参加協力した。

「トラウマを耕す」というテーマについて考察し、特に、語られないトラウマがアートや文学などを通してどのように表象されるのかについて、いくつかの事例をもとに分析した。

(4) 上記(1)~(3)を統合し、下記のような成果が得られた。

トラウマを生物学的・心理的・社会的に捉え、ジェンダーの視点を包括的に取り入れた入門書『トラウマ』を執筆・出版した。様々な要因と複雑に絡み合い、本人や周囲にも長期に影響を及ぼすトラウマのその背景や実際、向き合い方、治療法、社会や文化との関わりなどについて具体的に解説し、新書として出版することによって、幅広い読者にトラウマへの理解を促すとともに、今後の学際的

トラウマ研究の基礎的資料としての意義を持つと考えられる。

東日本大震災の発生に伴い、そのトラウマについてもジェンダー視点からのフィールドワークや研究を行った。また、震災直後には、トラウマへの理解を深めてもらうことや長期的な復興の過程におけるストレス、トラブルと冷静に向き合うこと等をテーマとしたブックレットを執筆・出版した。その反響や、トラウマ・心のケアに対する社会の関心の高まりを受け、研究会や講演、論文執筆等の依頼が多くなり、さまざまな形で共同研究や研究協力を行った。被災地への支援や共感を継続させ、複雑な復興の過程に長期的に取り組んで行く土壌作りのためにも、震災トラウマ、復興ストレスとジェンダーについて得られた成果を今後発展させて行く予定である。

5 主な発表論文等

(雑誌論文)(計32件)

宮地尚子、領域横断、臨床精神病理、査読無、34巻1号、2013、pp.3-7

後藤弘子、薬物乱用をどう防止するのか 危害最小化原理導入の必要性、犯罪と非行、査読無、175巻、2013、pp.146-158

宮地尚子、トラウマを語ること/語らないこと、月間福祉、査読無、95巻、2012、pp.44-45

宮地尚子、親の不安はこどもにうつる?、ちいさい・おおきい・よわい・つよい、査読無、87号、2012、pp.24-28

宮地尚子、沖縄戦と精神障害、沖縄タイムス、査読無、2012、6月22日13面

宮地尚子、文化とトラウマ、こころの科学、査読無、165巻、2012、pp.22-27

山上実紀・宮地尚子、医師と支援ボランティア、治療の聲、査読無、13巻1号、2012、pp.61-68

後藤弘子、世界の潮 長崎ストーカー殺人事件 DV への認識不足が招いた悲劇、世界、査読無、830巻、2012、pp.25-28

後藤弘子、女性に対する暴力は差別の表れである 国際人権法からみた女性に対する暴力、法律時報、査読無、84巻5号、2012、pp.76-80

後藤弘子、「女性化された」刑事司法を目指して、ジェンダーと法、査読無、9号、2012、pp.11-18

宮地尚子、本当の非日常の話、新潮、査読無、6月号、2011、pp.292-293

宮地尚子、いじめられた傷を抱えて、おそい・はやい・ひくい・たかい、査読無、No.61、2011、pp.68-73

宮地尚子、災厄のもたらす身体、現代思想、査読無、Vol.39-11、2011、pp.118-125

宮地尚子、「心のケア」とは何か、オルタ、査読無、9-10月号、2011、pp.24-25

宮地尚子、セクシュアリティはいかに語り得る/得ないのか/上野千鶴子×宮地尚子、現

代思想、査読無、Vol.39-17、2011、pp.152-173
後藤弘子、ファミリー・バイオレンス 新たな制裁のあり方をめざして、刑法学会、査読無、50巻3号、2011、pp.59-63
後藤弘子、大震災とジェンダー、ジェンダーと法、査読無、8号、2011、pp.126-131
坂上香、ライフアーズ 償いと回復の道標 10 ティワナから、月刊みすず、査読無、No.600、2011、pp.54-65
坂上香、ライフアーズ 償いと回復の道標 9 ロス・ルナス、月刊みすず、査読無、No.599、2011、pp.18-32
坂上香、ライフアーズ 償いと回復の道標 8 LA ワッツ、月刊みすず、査読無、No.598、2011、pp.38-49
①坂上香、ライフアーズ 償いと回復の道標 7 LA コンプトン、月刊みすず、査読無、No.597、2011、pp.52-67
②坂上香、ライフアーズ 償いと回復の道標 6 LA サウスセントラル、月刊みすず、査読無、No.596、2011、pp.54-65
③坂上香、ライフアーズ 償いと回復の道標 5 サンインドロ、月刊みすず、査読無、No.595、2011、pp.38-49
④坂上香、ライフアーズ 償いと回復の道標 1 出発点、月刊みすず、査読無、No.591、2011、pp.16-27
⑤宮地尚子、親密的領域での暴力は被害者から何を奪うのか、ジュリスト、査読無、1409、2010、pp.152-161
⑥宮地尚子、薬物依存とトラウマ 女性の依存症者を中心に、現代思想、査読無、38、2010、pp.48-55
⑦後藤弘子、女性と犯罪とメディア、刑政、査読無、121巻1号、2010、pp.66-67
⑧後藤弘子、児童ポルノ規制をどう考えるか、法学セミナー、査読無、671、2010、pp.40-42
⑨坂上香、ポスト・ファーマン時代のアメリカ合衆国における死刑の減少および死刑をめぐるメディア表象の変容 1990年代以降の「冤罪フレーム」に注目して、津田塾大学紀要、査読無、42号、2010、pp.165-196
⑩坂上香、「司法」を越える修復的司法の挑戦 教育とアートの現場から、自由と正義、査読無、61巻9号、2010、pp.9-15
⑪宮地尚子、国際トラウマ解離学会で安さんを想う、治療の声、査読無、9巻1号、2009、pp.165-196
⑫後藤弘子、最高裁痴漢無罪事件 供述の信用性の判断基準をめぐって、法学セミナー、査読無、656号、2009、pp.57-59

〔学会発表〕(計26件)

宮地尚子、For unspeakable trauma: Troidal Island (island with inner sea) Model、The Way to Look Back at the Past and Massive Violence in Japan and Spain: Encounters and Exchange、2013年3月7日、オビエド、スペイン

宮地尚子、復興の道のりと芸術の力、全労済文化フェスティバル2012、2012年3月19日、東京全労済ホール、東京都

後藤弘子、Female Drug Offender Program in Japan、The 3rd Annual Conference of Asian Criminological Society、2011年12月18日、National Taipei University、台湾

宮地尚子、震災トラウマと復興ストレス 環状島から、CIVITAS主催第一回シンポジウム『震災以後』、2011年12月11日、武蔵野プレス、東京都

後藤弘子、「女性化された」刑事司法を目指して、ジェンダー法学会第9回大会、2011年12月3日、東北大学、宮城県

坂上香、日本ボランティア学会ジョイントセッション「いのちの萌える場所へ 原発聞きから、こども・動物・自然を考える」、アートミーツケア学会、2011年11月27日、京都造形芸術大学、京都府

宮地尚子、傷のそばに佇む、質的心理学会、2011年11月26日、安田女子大学、広島県

坂上香、クロストーク「こども」から考えるケアとアート 大震災を経て、アートミーツケア学会、2011年11月26日、京都造形芸術大学、京都府

宮地尚子、女性支援と被災地支援、全国シェルターネット全国大会、2011年11月19日、宮城県

宮地尚子、DV等被害者にとってトラウマを語ること/語らないこと 支援者として傍らに寄り添うために、富山県女性財団講演会、2011年11月11日、富山県民共生センター「サンフォルテ」、富山県

宮地尚子、震災後における心のケアについて、岩手精神医学学術講演会、2011年10月7日、盛岡グランドホテル、岩手県

後藤弘子、Woman and Crime: Different Voices from Drug Survivors、国際犯罪学会、2011年8月8日、神戸国際会議場、兵庫県

坂上香、How the US Therapeutic Community (TC) Model Is Implemented in Japan: Reports on TC Practices in In-Prison and Community-Based Treatment、国際犯罪学会、2011年8月8日、神戸国際会議場、兵庫県

後藤弘子、Sexual Child Abuse and Simple Possession of Child Pornography、国際犯罪学会、2011年8月7日、神戸学院大学、兵庫県

宮地尚子、ジェンダーとトラウマ「性的支配」を考える、琉球大学国際沖縄研究所レクチャーシリーズ2011第1回、2011年7月15日、てんぶす那覇、沖縄県

宮地尚子、トラウマの語り 『環状島』その後、日本質的心理学会、2010年12月4日、東京大学、東京都

宮地尚子、傷を晒す/晒さない場所 環状島モデルをもちいて、東京プライド・シンポジウム、2010年7月4日、東京大学、東京都

宮地尚子、性暴力と隠れた権力/圧力、スポーツとジェンダー学会、2010年7月3日、神戸大学、兵庫県

宮地尚子、語られないトラウマと当事者と支援者、薬物依存連続セミナー、2010年1月23日、新大阪丸ビル新館、大阪府

宮地尚子、医療現場におけるDV被害者対応、北海道環境生活部「医療関係者向け配偶者暴力防止に関する講演会」、2009年11月29日、札幌市教育文化会館、北海道

②1宮地尚子、DV家庭における性暴力及び性虐待被害当事者へのサポート、DVシェルターネットワーク「全国公開講座北海道」、2009年11月28日、旭川市民文化会館、北海道

②2宮地尚子、語られないトラウマとPTSD 性暴力やDVの被害者ケア、兵庫県精神神経科診療所協会学術講演会、2009年10月17日、神戸生田神社会館、兵庫県

②3宮地尚子、性暴力被害者の心のケアに必要なもの、性暴力禁止法をつくろうネットワーク周年記念大会、2009年6月27日、大妻女子大学、東京都

②4坂上香、ファーマン判決以降の死刑と大衆文化 『国家殺人』のノーマライゼーションから批判的眼差しへ、アメリカ学会第43回年次報告会 部会B 監獄人口の激増とアメリカ社会、2009年6月7日、津田塾大学、東京都

②5坂上香、"Lifers: Reaching for Life beyond the Walls," Produced & Directed by Kaori Sakagami 映画上映、アメリカ学会第43回年次報告会、2009年6月6日、津田塾大学、東京都

②6宮地尚子、男性の性暴力被害とその影響、京都女子大学公開講座、2009年5月30日、京都女子大学、京都府

〔図書〕(計12件)

宮地尚子、『トラウマ』、岩波書店、2013、288

宮地尚子、「宙づりを生きる知のありかた」、「今福龍太・鵜飼哲編『津波の後の第一講』」、岩波書店、2012、286 (pp.67-87)

後藤弘子、「ジェンダー法学会編『講座ジェンダーと法 第3巻』」、日本加除出版、2012、232

坂上香、『ライフアーズ 罪に向きあう』、みずず書房、2012、288

宮地尚子、「看取りをめぐる」、「渋谷智子編著『女って大変。働くことと生きることのワークライフバランス考』」、医学書院、2011、266 (pp.179-206)

宮地尚子、「一九九五年から、二〇一一年への伝言」、「安克昌編『心の傷を癒すということ 大災害精神医療の臨床報告 増補改訂版』」、作品社、2011、443(pp.428-440)

宮地尚子、「外国にルーツをもつ家族と子どものケアに必要な視点」、「財団法人アジア・太平洋人権情報センター編『外国にル

ーツをもつ子どもたち 思い・制度・展望』」、現代人文社、2011、105(pp.48-57)

宮地尚子、『震災トラウマと復興ストレス』、岩波書店、2011、64

宮地尚子、「<内海>に沈んだトラウマを聴く」、渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本2011』、平凡社、2011、323(pp.128-131)

宮地尚子、『傷を愛せるか』、大月書店、2010、175

宮地尚子、「親のDVが疑われる患者が来院したとき」、高宮静男編『青春期精神医学』、診断と治療社、2010、336(pp.258-261)

キャロライン・M・バイヤリー著、宮地尚子監訳・解説、『子どもが性被害を受けたとき お母さんと、支援者のための本』、明石書店、2010、227

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮地 尚子 (MIYAJI, Naoko)
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：60261054

(2) 研究分担者

後藤 弘子 (GOTO, Hiroko)
千葉大学・大学院専門法務研究科・教授
研究者番号：70234995

坂上 香 (SAKAGAMI, Kaori)
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：60368066
(平成24年度より研究協力者)

(3) 連携研究者

大矢 大 (OOYA, Dai)
京都女子大学・発達教育学部・教授
研究者番号：40169074

田辺 肇 (TANABE, Hajime)
静岡大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：60302361